青山国際政経論集 100 号，2018 年 5 月

本田重美教授のご退任にあたって

国際政治経済学部長　内　田　達　也

本田重美先生は 1984 年に本学部国際経済学科に就任され，その後 34 年間の長きにわたり，研究・教育にご尽力いただきました。こ退職に際し，学部長として，本学でのお勤めに対して感謝の気持ちを込めて，御礼申し上げます。

本田先生は，本学にいらして頂く前は三菱総合研究所に在籍されていましたが，国際政治経済学部が創立 3 年目となる 1984 年に，学部の次代を担うべき研究・教育者として本学に就任されました。外国書購読，マクロ経済学といった学部生の経済学基礎教育から，労働経済学の専門教育まで広く授業を担当され，また 1995 年から 2000 年の間，国際経済学科主任や研究科の専攻主任をお務めになるなど，真に国際政治経済学部を支えてきたといって過言ではありません。

本田先生の専門分野の 1 つは労働経済学です。近年，労働人口の減少や働き方改革といったことで女性の労働についても注目されていますが，本田先生は 1990 年代に，夫婦間の家事・育児労働時間の代替弾力性を推計するという面白い研究をなさっています。妻が市場労働により多くの時間を当てたとき，夫によってどれだけ家事労働が代替されるのか。そうした本田先生の研究の中に日米比較の研究があるのですが，大方の予想に反して（？）日本の方が米国より代替の弾力性が，かなり高いことが示されています。この結果をどのように解釈するか難しい所ですが，本田先生は日本における女性労働の供給が増える余地あることを示されました。その後，女性の雇用者数や雇用者総数に占める女性の割合は増加して，いわゆる M 字カーブが緩やかになり，同時に女性の家事労働時間の減少，男性の家事労働時間増加が起こっています。イクメンなどとい

© Aoyama Gakuin University, Society of International Politics, Economics and Communication, 2018

う言葉が生まれる前に行った本田先生の研究の予測が，そのまま現実となっていることに，先生の慧眼を感じます。

こうした計量経済学を用いた分析を主に行う本田先生の下には，統計的手法で論文を書くことに意欲的な学生が集まり，毎年ゼミ生が，本学会が発行する『学生研究論文』に応募してきました。それらの論文は，データの収集から分析やその解釈など，非常に努力を要する力作ばかりでした。安易な解答のみを求めてしまいがちな今日，そうした努力を厭わず，むしろのめり込んで研究に没頭するように学生を育てる，本田先生の指導力に感服いたしておりました。

国際政治経済学部では，この 1 年間，宗教主任が不在だったために，教授会の開会祈祷を学部の先生方にお願いしてまいりました。クリスチャンである本田先生もその一人で，この役を快く引き受けくださいました。先生には慣れないお仕事で，ご負担だったと存じますが，われわれ教員にとっては，先生のお祈りに接することができ，貴重な時間をいただきました。本田先生が今後ともますますご活躍なされることをご祈念し，御礼を申し上げますとともに，これからも青山学院大学国際政治経済学部を見守ってくださいますよう，お願いいいたします。